

妹と婚約者の逢瀬を見てから  
一週間経ちました

◆ ————— ◆  
みどり  
Midori

Regina  
BUNKO

# 登場人物紹介

## イアン・ル・ブロンテ

侯爵。昔、とある出来事をきっかけにエリザベスに惹かれ、人知れず想い続けていた。

## ポール・ド・バルタチャ

エリザベスの弟。  
エリザベスの幸せを誰よりも願っている。

## リアン・ル・ブロンテ

エリザベスの年下の親友で  
イアンの妹。明るく素直。

## ケネス・デ・リンゼイ

エリザベスの婚約者。  
思い込みが激しい一面がある。

## リンゼイ子爵

ケネスの母親で  
リンゼイ家の女当主。  
やり手の実業家。

## ドロシー・ド・バルタチャ

エリザベスの妹でポール姉の姉。  
甘えたがりで我儘。

## エリザベス・ド・バルタチャ

浪費家の両親に代わって  
弟と領地を守り抜いた男爵令嬢。  
嫁ぎ先に夢を見ていたが……

## 目次

妹と婚約者の逢瀬を見てから  
一週間経ちました

書き下ろし番外編

静かな夜に

妹と婚約者の逢瀬を見てから  
一週間経ちました

「ドロシー、どうしたんだ？ 何故、そんなに悲しそうな顔をしているんだ」

この優しく甘い声は、わたくしの婚約者のケネス様のものです。しかしわたくしはこんな風に優しく話しかけて頂いた事はありません。ケネス様が優しくそうに話しかけるのは、妹のドロシーです。わたくしとケネス様の結婚まであと一週間という今日、婚約者と妹が抱き合う場面に遭遇してしまいました。

二人はわたくしが発した僅かな音に気が付いていません。誰も見ていないと思つていいのでしよう。大好きな婚約者のケネス様が、妹のドロシーを力強く抱きしめています。三年間も婚約者だったのに、わたくしは、一度たりともケネス様に抱きしめられた事がありません。なんだかとても、空しい気持ちです。

思わず身を隠して様子を窺うと、ケネス様がドロシーをあやすように優しく微笑んでおられました。先程結婚式を楽しみにしていると笑つておられた顔を見たからこそ、わ

たくしに向けた言葉は偽りだったのだと分かります。ケネス様と過ごした日々を思い出しましたが、こんな風に優しく声をかけて頂いた記憶は、一度もありません。ケネス様にお渡ししようと思つていた刺繍入りのハンカチが、静かに床に落ちました。

ドロシーは、ハンカチで顔を隠して泣き声を上げています。だけど、あれは嘘泣きです。

両親に甘える時、わたくしに責任を押し付けられる時、妹のドロシーはいつも泣くのです。妹は、泣けば自分の思い通りになるとこれまでの人生で学習してしまいました。両親がドロシーだけを可愛がり、無遠慮に甘やかすからです。わたくしは姉として妹を正そうと何度も注意しましたが、無理でした。どれだけわたくしが注意してもドロシーが嘘泣きをすれば、両親がわたくしを責めるのですもの。

そのうちドロシーは姉のわたくしを蔑むようになりました。挙句、勝手にわたくしの部屋に入って物を奪っていくようになったのです。最初は注意していましたが、ドロシーが嘘泣きをするとすぐに父に殴られるので諦めました。

今では、アクセサリーやドレスは盗られる前提で購入しています。必要な時に使用出来ればあとはドロシーに盗られても構いません。お友達からのプレゼントや、ケネス様からの大切な贈り物は、似たものや同じものを用意し、ドロシーの目を誤魔化していま

した。

いつもの事ですし、自衛していたので慣れっこだったのですが、まさか婚約者まで奪われるとは思いませんでした。信じられませんが、これは現実なのですよね。ドロシーは、両親に強請<sup>ねだ</sup>る時と同じようにハンカチで顔を隠し、悲しそうにケネス様に抱きつきました。

「お姉様に、大事にしていた髪飾りを盗られてしまいましたの。結婚祝いに渡せと言われました。仕方ありませんわよね。お姉様はリンゼイ家に嫁ぐ大事なお方なのですから……」

そう言ってハンカチで眼<sup>まぶた</sup>を押さえる妹は、何も知らないケネス様からすれば、庇護欲を刺激するのでしょう。けれど本当は、ドロシーがわたくしの髪飾りを持っていったのですよ。髪飾りだけじゃない、ドレスも、アクセサリーも、これから他の家に嫁ぐお姉様には不要なものだと、ほとんど自分のものにしてしまったじゃありませんか。両親からのアクセサリーやドレスは、まだこの家にいる自分のものだというのが妹の言い分ですが、そもそもわたくしは一度も両親から物を貰った事はありません。わたくしの持ち物は、頂き物を除けば全てお義母<sup>かあ</sup>様と運営した商会で稼いだお金で買ったものです。

もっとも、両親がわたくしに何かを贈るなんてありませんけどね。自分達の贅沢と、ドロシーを可愛がる事にしかお金を使わず、領地に使うお金にも手を出そうとする両親には嫌悪感しかありませんもの。家族で信用出来るのは弟だけです。

実の家族のほぼ全員と不仲だったからこそ、嫁ぎ先には期待しておりました。ケネス様がわたくしに暴力を振るうのはわたくしが生意気な口をきいた時だけです。普段は、優しい方でした。ですが、今日の前に広がる光景を見る限り、ケネス様が優しいと思っていたのはわたくしの勘違いだったようですね。お義母様もたまに平手打ちをしますけど、力も弱いし、そこまで痛くありません。最近は、とても優しいです。弟は、ケネス様がわたくしに暴力を振るう事は知りません。だって、大事な弟に心配をかけたくありませんもの。弟のポールはとても優しい子なので、わたくしが暴力を振るわれていると知れば、悲しむし怒るでしょう。父がわたくしを殴った時も、何度も父に抗議しようとしてくれましたもの。けど、父の不興を買うと、ポールが家でわたくしのように冷遇されてしまいます。だから、いつもポールを宥<sup>なだ</sup>めていました。貴族は傲慢な人が多いのですから、わたくしの境遇もそこまで酷いとは思いません。ポールのように、鍛練を欠かさないにもかかわらず家族にも使用人にも丁寧<sup>まじまじ</sup>に言い含める貴族の方が稀<sup>まれ</sup>なのです。父の友人達も社交の場では紳士ですけど、陰で使用人を恫喝<sup>どうかく</sup>しておりますもの。

ケネス様と結婚すれば、優しいお義母様と暮らせますし、理由のない暴力に怯える事

はなくなりません。わたくしは、結婚する日をとでも楽しみにしておりました。

「だけど、一週間後に夫になるはずだった大好きな人は妹と睦み合っておられます。

ケネス様は、ドロシーを抱きしめてわたくしの悪口を叫びました。

「ああ！ 可哀想に！ エリザベスはなんて酷い女なんだ！ 泣かないでドロシー。僕が最高品質の髪飾りをプレゼントするよ！」

「ありがとうございます。ケネス様」

ドロシーが可愛らしい笑みを浮かべます。

ケネス様も、ドロシーを信じるのですね。また同じ事が繰り返されるのですね。心がスウツと冷えていきました。

「楽しみにしていてくれ。明日には持つてくるよ。あの悪女は、明日は母上と会うと言っていた。だからいつもの秘密の場所で会おう。結婚式が憂鬱で仕方ないよ。エリザベスがあんな悪女だと知っていたら婚約なんてしなかったのに……。僕は、ドロシーと結婚したかった。でも、母がエリザベスを気に入っていてね。家同士の婚約なのだから、ドロシーでも良いじゃないかと何度も言ったのだけど、母は許さなかった。だから、僕が意地悪なエリザベスをドロシーから引き離すよ。結婚はするけど、あんな女愛するものか。寝室は別だ！ 三年で子が出来なければ、エリザベスの有責で離縁出来る。母は

エリザベスを気に入っているけど、子が出来ないなら諦めるだろう。そしたら、ドロシー……僕と結婚してくれるかい？」

自分の耳を疑いました。

この人は何を仰っているのでしょうか？ 百年の恋も冷める一言です。

わたくしの貴重な三年間を無駄にこの浮気男に捧げろというのですね。なんと自分勝手なんでしょう。怒りが湧いてきましたわ。こんな男と結婚するのは絶対に嫌です。

わたくしは現在十八歳、妹は十五歳です。妹は今年この国で結婚が許される年になったばかりですから、三年くらいはなにかかなりですけど、わたくしは三年後に二十一歳になります。平民ならまだしも、わたくしは男爵令嬢。結婚相手を探すのは難しいですわ。二十歳を超えてしまえば、結婚出来る相手は絞られます。しかも、子が出来ないと濡れ衣を着せられてしまえば、まともな婚姻は望めません。

お義母様はケネス様が生まれるまでの十年間、子爵夫人として立派に生きておられましたし、今も女子爵として辣腕を振るっておられますが、それはお義母様に領地経営の才覚があり、かつ、今は亡き先代子爵がお義母様を認めていたからです。夫となるケネス様があのような事を言っている以上、わたくしはお義母様のように生きられません。このままでは、三年後に離縁されます。そうなれば、修道院に行くか、年上貴族の後妻

になるか、平民として暮らす未来しかありませんね。

わたくしは商会を運営しておりますから平民の方との交流もありますし、平民になる方が良いかもしれませんね。がんじがらめの貴族と違って、平民の方は自由で輝いておられますもの。才能豊かな方も多いですし、貴族のように結婚が全てではありません。年齢なんて気にせずに好きな人と添い遂げておられますし、子どもは授かりもので子が生まれなから離縁されるなんて滅多に聞きません。一夫一妻ですから、仲良く過ごしているご夫婦も多いです。子が生まれないと跡取り問題などが発生する為、一夫多妻の貴族社会とは別世界のようにすわね。

とはいえ、我が国で第二夫人を持つ事が許されるのは伯爵家の当主からです。我が家も一夫一妻ですもの。子爵、それも嫡男とはいえ未だ当主ではないケネス様には使えない権利です。…使えなくて本当に良かったですわ。

そう考えると、貴族より平民の方が良いかもしれません。いっそ、今すぐ平民になりましょうか。ケネス様は大好きな妹と結婚出来て嬉しいでしょうし、両親も賛成するでしょう。

いえ、お世話になったリンゼイ家のお義母様に不義理はしたくありません。嫁入り教育と称して商売のやり方を教えて下さったお義母様はわたくしの恩人です。たくさん苦労をしましたし、散々叱られましたでしたが、多くの利益を出す事が出来るようになるまで、根気強く我が家との取引を続けて下さったのです。そのご恩に報いず、お詫びも別れの挨拶もしないまま、黙って平民になるのは絶対に駄目です。

それに、ドロシーの思い通りになるのはなんだか悔しいです。ドロシーに大切なものを取られたのは何回目でしょうか。まさか、婚約者まで取られるとは思いませんでした。ケネス様の腕の中で、ドロシーが甘く囁きます。

「ケネス様、わたくしも、ケネス様をお慕いしております。でも、わたくしも貴族の娘。三年もお待ち出来ませんわ。父も、姉が嫁げばわたくしの番だと婚約者を選定しておりますもの。どうか、姉とお幸せに。わたくしは、ケネス様との思い出を糧に貴族として強く生きますわ」

ドロシーの嘘つき。貴女がわたくしから奪ったものを大切にしたり、貴族として何かを我慢した事も、一度だってないじゃないですか。

わたくし達の弟であるポールが生まれる前、わたくしは跡取りだから甘えてはいけません、両親に可愛がられる事はありませんでした。その横で、ドロシーはいずれ家を出るのだからと甘やかされていましたわ。そしてポールが生まれた途端、ドロシーの扱いは変わらないまま、わたくしだけ簡単に切り捨てられたのです。

その後、少女時代の楽しみを全て投げ捨てて、両親が面倒がつてやらない領地の仕事を代行したのも、弟を育てたのも、わたくしと使用人達です。両親は、まるで男児を産みさえすれば勝手に育つとも思っているかのように、ポールの教育には一切興味を持ちませんでした。危機感を覚えたわたくしは、幼い弟に様々な事を教え込みました。努力の甲斐あり、今年で十歳となったポールは、幼いながら文武に秀で、両親にもドロシーにも可愛がられるほどの人あしらいの上手さを身につけています。弟の成長と、それをわたくしの成果だと労いたわってくれる使用人達だけが、わたくしの支えでした。

ふわふわの金髪で可愛らしい顔だけを武器に、礼儀知らずで言葉遣いも粗雑、貴族にとって命綱である筈のマナーすらろくに覚え、笑って誤魔化して生きてきたドロシーにだけは、『貴族として』だなんて口にしてほしくありません。

つくづく思い返すも、どうして両親は、ドロシーにだけお金をかけて甘やかすのでしょうか。ドロシーは、そのお金をどぶに捨てるかののように、淑女らしくない振る舞いばかりするのでしょう。わたくしにもポールにもお金を出してくれないのに、ドロシーにだけは、いいところに嫁がせるのだとたくさんドレスやアクセサリーを買い与え、立派な家庭教師を雇っていました。本当なら、跡取りとなるポールにたくさん教師をつけないといけないのに。

余談ですが、わたくしの当主教育は執事のセバスチャンと侍女長のリアが、ポールの教育はその二人に加えてわたくしが務めていました。ポールは身体能力が高いので、剣の訓練をきちんと行えば、護衛をつけずとも一人であしらえるほど強くなれるとセバスチャンが見抜いた時は、両親にポールの家庭教師を頼みました。しかし、受け入れてはもらえませんでした。だから、お義母様に教えて頂き設立した商会の儲けで、家庭教師を雇ってお金を捻出しました。わたくしの教育は、全てセバスチャンとリアが行ってくれました。二人は元々貴族でしたから、様々な事を教えてくれました。本当に、感謝しています。

ポールの家庭教師の費用を全て用意出来たのが先月の事です。ポール以外はお金を使えないように手配しました。領地運営の資金捻出の為に設立した商会の運営をポールとセバスチャンに任せましたが、先週の出来事です。

必要な引き継ぎは全て終わり、来週には結婚して幸せになるのだと思っていました。リンゼイ子爵家に嫁ぐ日を楽しみにしていたのです。

貴族である以上、我慢する事は多いだろうけれど、ケネス様とお義母様と暮らすのは楽しみでした。ケネス様となら、きっと幸せな家庭が築けると信じていました。

だけど、これは無理です。

「くそっ……あの悪女……エリザベスさえ……いなければっ……」

ケネス様は、わたくしが嫌いなのですね。お義母様と共にわたくしに会いに来て下さった頃は優しかったけれど、あの時の優しさは、演技だったのでしょうか。結局、彼も両親と同じく、ドロシーの言葉だけを信じる人なのですか。

すすり泣く妹と彼女を優しくあやす婚約者様は、今も抱き合っておられます。それどころか、口付けまで交わし始めました。

わたくしには、一度も口付けなんてして下さらなかったのに。ケネス様は奥手だと聞いておりましたが、違ったのですね。

そもそもここは我が家の廊下ですよ、誰かに見られたらどう説明なさるの？

そんな皮肉めいた言葉をかける余裕すらなく、婚約者と妹の裏切りに、呆然と立ち尽くすしかありませんでした。

わたくしこと、男爵令嬢エリザベス・ド・バルタチャと、子爵家の嫡男であるケネス・デ・リンゼイ様の婚約が整ったのは三年前の事です。

わたくしを気に入った御当主からの打診でした。リンゼイ家は先代の御当主がお亡くなりになり、ケネス様のお義母様が跡を継がれました。女性の当主は珍しいのですが、

その物珍しさよりもやり手の経営者として有名な方です。釣り合いはとれるとはいえ格上の子爵家からの婚約の申し入れに最初は驚きましたが、持参金は不要な上に高額の支度金まで頂けるといふ破格の申し出に、両親は大喜びでした。初めてお会いした時のケネス様は、とても優しかった事を覚えています。

「母が薦める子なら間違いないよね。これからよろしく」

そう言って、この国では婚約の証となるブローチを手渡して下さいました。そのブローチは、今もわたくしの胸で虚しく輝いております。ですが、冷静になるとケネス様は、わたくしの事をお好きではなかったのでしょうか。ドロシーの前で見せている優しい笑顔……あんなに嬉しそうな顔、初めて拝見致しました。わたくしと話す時も笑っておられましたけど、あの時の笑みとは全く違います。ケネス様は、間違いなく妹がお好きなのです。

冷静になつてみれば、前々からおかしな点が多かったと思います。最初はお互いの家を行き来していたのに、一年ほど前から交流の場所はいつも我が家になり、お義母様も交えてお話しするのではなく、ケネス様がお一人で来られるようになりました。そして、以前は何時間もお話をして下さったのに、最近は三十分程度お茶を飲むだけで、結婚の準備があるからとすぐ帰ってしまつておりました。結婚が近いから、子爵家に会いに来

る移動時間や自分と過ごす時間を家族との時間にあててほしいのだと仰っておりますけど、きつとドロシーに会いたかったのですね。

最近はお義母様に、ケネス様とどんな話をしたのかと聞かれるたび、ケネス様がお義母様に叱られないよう、いつも必死で誤魔化しておりました。交流の時間が少ないと分ると、ケネス様がお義母様と話している間、たっぷりドロシーと逢瀬を重ねていたのでしょうか。あの浮気男、本当にどうしてやりましょようか。

そんな事を考えていると、いつも優しい侍女長のリアが、そつと小声で話しかけてきました。

「お嬢様、ここは場所がよろしくありません。こちらに」

そう言つて彼女はわたくしを空き部屋に連れていつてくれました。

「本日は、この部屋を使う予定はありません。鍵をかけたので、誰も入ってきません。

本日はリンゼイ子爵との面会予定含め、お嬢様の予定は一切ありません」

「ポールは……?」

「剣術の先生と騎士団に課外授業に行つておられます。旦那様と奥様は、お買い物で夜まで戻られないでしょう。ここなら馬車の出入りも分かります」

「リア……」

「この部屋は密談などに使われるので防音されています。一人がよろしければすぐに出ていきます。どうぞ、エリザベスお嬢様のお好きなように」

ああ、この優秀な侍女長はいつもそうです。

最低限の救いの手を差し伸べて、あとは自分で考えるように促してくれます。リアのおかげで、こんな理不尽な家でも強く生きられました。

「リア……わたくし、ケネス様とドロシーが許せないの」

「はい。私も腹が立っております。どうぞお嬢様のお好きなように。私も、夫も、ポール様もお嬢様の幸せを願っております」

夫、とは執事のセバスチャンの事です。

「……いつから……だったのかしら?」

「私も初めて見ましたのでなんと……すぐに調査致します」

「お願い。それから、リア」

「はい。なんでございませうか?」

「わたくしが結婚せずにリンゼイ家のお義母様に恩を返す方法はあるかしら?」

「……それは」

リアが口ごもるといふ事は、現実的な手段としては何もないのでしよう。

「難しいわよね。でも、もう一秒たりともケネス様に会いたくないわ。幸い、今日で訪問は終わり。次に会うのは結婚式よね？」

「左様でございます」

「元々は、お義母様と商会の準備にあてるつもりだったけど……そうだわ！明日はお義母様と商談を兼ねた観劇の予定。ねえ、ドロシーはわたくしの予定を知っている？」

「いえ、ご存知ないと思います」

「そうよね。絶対バレないようにしてちょうだい。本当は、リアとセバスチャンを招待しようと思って二枚余分にチケットを購入しておいたのだけど、観劇はまた今度で良い？」

まずは、お義母様に現実を知って頂きましょう。わたくしとケネス様の仲は修復不可能で、我が家と縁を繋ぐのであればドロシーとケネス様を結婚させるしかないと分かって頂きます。そうなれば、お義母様は、ドロシーを厳しく躾けると思いますし、ドロシーだって『心からケネス様と結ばれない』のなら頑張るでしょう。だって、あんなに熱い口付けを交わすほど『本気で愛し合っている』のですから。

ありえないとは思いますが、お義母様がドロシーとの結婚を認めず、予定通りケネス様とわたくしを結婚させようとするなら……別の対策を考えましょう。とにかく、何かなんでもケネス様との婚約を解消します。

リアは、わたくしを取り出したチケットを見て頭を下げました。

「お嬢様……使用人にそのような気遣いは必要ありません」

「リアとセバスチャンが教えてくれたから、貴族としての教養が身についたわ。嫁ぐ前に恩返ししたいと思っていたの」

「私の望みは、お嬢様がお幸せになる事です。夫も、そう思っていますよ」

子どもがいない二人は、わたくしとポールを自分の子のように可愛がってくれました。ドロシーが生まれてから両親はわたくしに構わなくなりましたが、二人のおかげで寂しくなかつたのです。

「じゃあ、わたくしは絶対幸せにならないとね。まずはドロシーと愛し合っている婚約者をどうにかしましょう。あんな男と結婚するのだけは避けたいわ。いくらお義母様が素晴らしい方でも、愛する努力すらしようとしない男と結婚はしたくないもの」

貴族の結婚は政略結婚が主流です。ですから、はじめから愛せとは申しません。ですけど、夫婦になるのですから愛する努力はして頂きたいですわ。わたくしは、ケネス様

を愛する努力をしました。最初は探り探りでしたが、ケネス様を愛していました。お優しい笑顔が、大好きでした。

たった今ケネス様への愛は冷めましたけどね。もう二度と顔も見たくありませんわ。

「では、ドロシー様に観劇のチケットをお渡しすればよろしいですか？」

「わたくしからとは言わずに渡して。ドロシーの好きそうな演目だし、観みに行くと言いつつ思うわ。きっとケネス様と一緒にきたがる」

次に出す店は、夫婦や恋人をターゲットにするつもりでした。だから、勉強の為に恋人に人気の劇を観に行く事にしたのです。本当はケネス様と行きたかったのですが、断られました。日程や演目をお伝える前に断られてしまって、落ち込んでおりましたわ。嫌われたのではないかと不安でしたが、それ以前の問題でしたね。

「浮気男とドロシー様が一緒に劇を観覧している様子を、リンゼイ子爵に目撃させるおつもりですね？」

リアは優秀です。

何も言っていないのに、わたくしの意図を察してくれました。

「お願い出来る？」

「はい。お任せ下さいませ。演目は恋人や夫婦向きですので、ドロシー様は浮気男と行

きたがるでしょう。あの方は見栄っ張りですから、一人で観劇したりなさいませんもの。すぐに渡してまいります。浮気男に明日の予定がない事は把握しております。お嬢様がお誘いしているのに、日程も聞かず断ったので腹が立ち、さりげなく伺うかがいましたところ、予定はないが観劇に興味がないのだと仰ういましたので」

ドロシーは、使用人をあまり信用していません。けど、我が家の全てを把握し取り仕切るといっても過言ではないリアとセバスチャンは別です。リアから渡されたチケットなら、ドロシーは喜んで行くでしょう。急だから、お友達も誘いにくい事ですし、恋人に人気の演目なので、見栄っ張りのドロシーは男性と行きたがるでしょう。きっと、ケネス様を誘うはずですよ。

「まあ。ケネス様は嘘つきね。この演目は、ケネス様もお好きな筈よ。大好きな俳優も出ているのですもの」

「あの浮気男は、リンゼイ子爵からお声掛け頂いた時しかお嬢様と観劇に行きません。以前から、不審に思っております。もっと調査すべきでした。申し訳ありません」

「言われてみれば、チケットをお渡しした時は受け取って頂けるのに、一緒に行こうとお誘いしたらいつも断られていたわね。わたくし、鈍いわね。こんなに嫌われていたのに……」

予定がなくても、わたくしとは行きたくないですね。ドロシーと一緒になら、喜んで行くのでしよう。そう思うと、涙が止まりません。

「ごめんね……リア。面倒をかけて」

「面倒ではありません。ご安心下さい。お嬢様、私は部屋を出ますので、私が出たら鍵をかけて下さい。こちらに水桶も、タオルも、お化粧品もあります」

本当に、リアは優秀です。

彼女から学んだ事はたくさんあります。淑女はいつでも凛として、弱みは人前で見せてはいけないというのも、幼い頃に叱られた事のひとつ。

泣くのは信頼出来る人の前だけにしなさい、そして、泣き崩れるのは一人の時だけにしようにと指導してくれました。何があっても泣くな、ではなく、泣いていい場所を作り、そこで泣きなさい、と教えてくれたのです。

「うっ……くっ……わあ……わあああん!!」

リアが出ていって、鍵をかけてから胸のプローチを投げ捨て、わたくしは泣き続けました。

涙が枯れた頃に、リアが戻ってきました。

弟からのプレゼントだと言って、ドロシーにチケットを渡してくれたそうです。ポールは、ドロシーに好かれていますので、より信用してもらえましょう。

ちなみに、リアがドロシーの部屋を訪ねると、長々と待たされたそうです。押し問答の末、ようやく部屋に入ると、クローゼットから男性の服がはみ出していたそうですわ。侍女もドロシーも焦っていたそうですから、ケネス様が隠れていたのは間違いありません。隠れるなら上手く隠れて頂きたいですわ。服がはみ出しているなんて、お粗末です。

「あんな人達に無駄な時間は使えません。部屋に籠こもっているようでしたので、私が強引に押し入れれば、慌てて隠れると思いました。これで、あの浮気男が聞いている場でドロシー様が二人分のチケットを受け取った事になり、誘う相手に選択の余地がなくなりました。目的は達成です」

リアは淡々と状況を説明してくれました。

わたくしが泣いている間に使用人の調査も済ませてくれたそうです。

二人の仲を知っている人はほとんどいませんでした。数少ない目撃者は、お父様から賄賂わいろを貰って口をつぐんでいたと分かりました。つまり、お父様もドロシーの行為をご存知だったのです。相変わらずドロシーに甘いんですね。姉の婚約者に言い寄る娘を叱

るくらいの常識は持ち合わせておいてほしかったのです。今までバレなかったのはドロシー付きの使用人とお父様に守られていたからなのでしょう。

あの廊下は人通りが少ないので、ドロシーの部屋まで待たずにいちゃついていたのでしょうね。幸い、わたくしとリアアが二人の口付けを目撃した事は、気付かれていません。本当に、リアと一緒に良かったです。そうでなければ、冷静になれないままドロシーとケネス様を問詰めていたでしょう。その場合、わたくしはすぐ感情的になって声を荒らげる醜い婚約者だと言われ、不利になっていたかもしれない。両親はドロシーの味方ですし、お義母様も証拠がなければ息子のケネス様の言葉を信じるでしょう。

あの時取り落としたプレゼントは、リアが回収してくれました。そして、わたくしの手で暖炉に放り込まれ、灰になりました。頑張って作った刺繍入りのハンカチだったのですが、もう二度とケネス様の名前も家紋も見たくありません。燃えさかるプレゼントが灰になると、ケネス様への愛情も綺麗さっぱり消え去ってしまいました。

帰ってきたポールは報告を受け、泣きながらわたくしに抱きついてきました。もう大きくなってきたから、家族でも婚約者以外の異性と抱き合ってはいけないと教えていたのですが……今回ばかりはポールの優しさが嬉しくて涙が止まりませんでした。

「姉さんを裏切るなんて許せない。あの裏切り者共を今すぐ僕が切り捨ててくるよ」

そう言って、ポールは本当に剣を持っていこうとしました。

「待って！ 実の姉と子爵家の跡取りに剣を向けるなんて、駄目よ。そんな事したらポールがタダでは済まないわ！」

「あんな人、姉だと思った事はない。血は繋がっているし、表向きは姉さんと呼ぶけど、僕の姉はエリザベス姉さんだけだ。それに、あの男も許さない。姉さんを大事にすると言うから祝福したのに……前々から怪しいとは思っていたけど、あんなクズだと思わなかった。切り捨てるのが駄目なら、手袋を叩きつけてくるよ」

「決闘を申し込まないでちょうだい！」

「大丈夫。僕は成人した騎士にも勝ったんだ。あのクズはそんなに鍛えてない。負ける訳ないよ」

そこからポールを宥めるのは大変でした。

セバスタンもリアもポールに賛成して、決闘の作法を指導し始めてしまいましたので、必死で止めました。

けれど、ポールが泣きながら自分の事のように怒ってくれたおかげで、わたくしの悲しみはだいぶ癒えました。泣いていても何も変わりません。わたくしは、前に進むしか

ないのです。幸い、わたくしには泣いてくれる大切な家族がいます。厳しくも優しい使用人達がいます。わたくしは一人ではないのです。

「ポール、セバスチャン、リア。本当にありがとう。もう大丈夫よ。絶対にあの男と別れる。ケネス様がドロシーと結婚したいなら勝手にすれば良いと思っっているわ。けど、今までの代償は支払って頂くわ。必ず」

「当然だよ！（です！）」

「まずは、お義母様にこの事実を知って頂きましょう。ケネス様には大ダメージよ」

「結婚式は来週だよ。世間体があるから、見逃して結婚しろとか言われたい？」

「可能性は低いと思うけど、ケネス様と我慢して結婚しろと言われたら、姿を消すわ。その場合はポール、しばらく商会に匿かくまわせて。もうお義母様の手は離れているし、平民になって従業員として働いていれば諦めて下さるでしょう。平民と貴族は結婚出来ないもの。ドロシーと結婚しろとお義母様が言い出すのはありえるけど、それは大歓迎よ。ドロシーはお義母様の厳しい指導を受けるわ。あの甘えっ子に耐えられると思う？」

「無理だね」

「でしょう？ それに、お義母様は浮気や不倫が大嫌いなもの。ケネス様にも浮気をするなど常々仰っていたから発覚したただけでかなり絞られる筈よ。亡くなられたお義父様とうが

「あちこちに愛人を作っていて、大変ご苦労なされたのですって。だからきつと、ケネス様は跡取りから外されるわ。弟君が優秀だと聞いているから、問題ないでしょうしね」  
「じゃあ、ドロシーは結婚出来ても当主になれない浮気男と暮らさなきゃいけない訳か」

ああ、可愛い弟が冷たい目をしておりますわ。ドロシーの呼び方もいつの間にか呼び捨てになっております。

「その状態になっても離縁はきつと無理よ。贅沢もさせてもらえないし、毎日お勉強させられる」

「あの女には地獄だろうね」

「ドロシーが反省して心を入れ替えればあの子の為になるし、駄目でも我が家の財を食い潰すドロシーを引き取って頂けるのよ。こんなチャンスはないわ」

ドロシーは妹です。でも、ここまでされたドロシーを気遣えるほどわたくしは優しくありません。

お義母様はなんだかんだケネス様に甘いので、浮気について厳しく叱り飛ばしても、最終的にドロシーとの結婚を認める事はありえるでしょう。でも、ケネス様を跡取りにする事はないと思います。根回しもせずに婚約者の妹と浮気をする人が当主になれるの

か……冷静に判断して下さると思います。

ドロシーが家にいなければ、無駄遣いをする人が一人減ります。ポールが成人するまで、なんとか家に残りたいですが、無理なら平民になってポールを支えましょう。

「姉さんは、良いの？ あの男を愛していたよね？」

「あんなもの見せられても愛し続けられるほどわたくしの心は広くないの」

「姉さん……」

「気にしないで。結婚前に分かって良かったわ。あんなのと結婚しても幸せになれないもの。幸い、今ならギリギリ間に合う。わたくしは、運が良かったのよ」

ケネス様の事は好きでした。けど、今は大嫌いです。

ケネス様との幸せな思い出がたくさんあった筈なのに、一切思い出せません。だからもう、良いのです。

次の日になりました。わたくしはお義母様と劇を観覧しております。

ドロシーがわたくしの部屋を漁ってアクセサリーを持っていったとリアから報告がありましたので、きつと着飾ってケネス様と観に来ると思います。緊張しますわ。

「お義母様、本日はありがとうございます」

「こちらこそ。素敵な劇に招待してくれてありがとうございます。ケネスも誘ったのだけれど、友人との約束があるのですつて」

「そうなのですね。残念ですわ」

え、友人との約束ですか？ ケネス様が来なかったらどうしましょう。けど、ドロシーが着飾るならきつとお相手はケネス様ですよね？

不安に思っておりますら、お義母様が嬉しそうに声を弾ませました。最初は厳しかったお義母様ですが、今はわたくしを認めてくれて自分の娘のように可愛がって下さいます。

「ついに来週は結婚式ね。エリザベスが娘になるのが楽しみだわ」

「わたくしも、お義母様と家族になれる日を指折り数えて楽しみに待っております」  
嘘はついていません。けど、胸がチクリと痛みます。

お義母様を騙す<sup>だま</sup>すようで心苦しいのですが、わたくしが訴えるだけでは足りません。母は厳しいいつもケネス様は仰いますけど、お義母様はケネス様をとて大事になさっています。だって、お義母様はケネス様の誕生日にはいつも贈り物を用意しておられますし、商会の商品を査定する時にも、ケネス様の好きそうなものがあれば個別に購入なさっています。それだけ大事にしている息子が不貞をしたと聞いても、すぐには信じら

れないでしょう。

時間があれば、お義母様に心労を与えないよう、ゆっくり話し合いの機会を設ける事も可能でした。

でも、来週には結婚式なのです。もう時間がありません。

悲しいですけど、ここできっぱりと断ち切る方がお互いの為ですわ。

お義母様の事は今でも大好きです。両親に放っておかれたわたくしは、リアとお義母様を心から慕っています。厳しい方で、街中で叱られた事もありますけど、両親に褒められた事も叱られた事もないわたくしはお義母様に叱られる事が嬉しくて幸せでした。

お義母様は家族になるのだからと、色々な事を教えて下さいました。

お義母様のご指導のおかげで領地は潤うようになりました。飢饉の時は、たくさんのお金を分けて下さいました。商会を作り、一生懸命働いて頂いた食料のお金を三倍にして返した時、初めてお義母様が褒めて下さいました。あの時は、とっても嬉しかったです。

ですがごめんなさい、お義母様。わたくしはもう、ケネス様を愛せませんわ。

今までの事を思い出していると、涙が出そうになります。いけませんわ。まだ劇で泣くには早いです。今泣けば、不審に思われてしまいます。

複雑な感情を抱えながら劇を観覧しておりましたが、第一幕が終わってもあの二人の姿を見つめる事は出来ませんでした。来なかったのかしら。他の手を急いで考えないといけないわね。

ひとまずリアに連絡を取ろうと思いい、外に出ようとすると、騒がしい声がありました。どうやら、第一幕の間に合わず外で待たされた方が騒いでおられるようです。

なんだか聞き覚えのある声ですわ。嫌な予感がして声が聞こえた方向を見ると、ケネス様がドロシーをエスコートしておられました。

ずいぶんくっついてますね。わたくしは、あんな風にエスコートして頂いた経験はありません。チクリと胸が痛みました。もう、本当に終わりなのですね。

劇場内に、ドロシーの上品な声が響きます。

「もう！ 途中からでも入れてくれれば良いじゃない！ 気が利かないわね！」

「全くだ！ 可愛いドロシー、すまないね。さ、ゆっくり見ようね」

「はい！ 愛しておりますわ！ ケネス様！」

ドロシーが、ケネス様に寄り添って……く、口付けを交わしております。

ここは、劇場ですよ!?

常識を考えて下さいまし！ 劇場で口付けをしても良いのは、特別席に座っている時だけです！

特別席は、高位貴族の方しか購入出来ませんのでドロシーが知らなくても仕方ありませんけれど……いや、そんな事ありませんわ。成人したこの国の貴族なら知っていて当然です。

ああ、なんだか頭がクラクラしてまいりました。ドロシーはともかく、ケネス様は常識があると思っておりましたのに。こんなに人目があるところで口付けなんて、大恥です！

下品……下品すぎますわ！

ケネス様も、ドロシーにうっとりせずには止めて下さいまし！

「……ケネス……？」

隣から、お義母様の冷たい声が聞こえます。

自分で仕組んだ事なのに物凄く怖いです！！

だけど、わたくしもここで初めてケネス様の裏切りを知ったと思って頂きませんと。腹立たしいのですが、まだ胸にはケネス様から頂いたブローチがあります。これをあの男に突き返すまでは、逃げる訳にまいりません。昨日、投げつけた時に少し欠けてし

まったブローチは、まるで、わたくしの心を映しているかのようです。ケネス様と婚約してからずっと身につけていた大切なものでしたのに、今は、自分の胸に存在しているのが忌まわしくて仕方ありません。

さあ、頭を切り替えましょう。昨日の自分を思い出すのです。わたくしは、震えた声で呟きました。

「ケネス様……何故……妹と……？」

「……エリザベス……あの下品な娘はエリザベスの妹なの？」

「は、はい。申し訳ございません」

低い、とても恐ろしい声です。

今更ながら、『自分が苦勞したから、息子達は浮気をしないように育てた』と、いつもお義母様は仰っていた事を思い出します。だから、大丈夫だと思っておりました。感じていた僅かな不安を、全て押し潰してしまったのです。

……お義母様のせいにしてはいけませんね。悪いのは、ケネス様とドロシーです。そして、ケネス様と仲良く出来ず、浮気の子兆に気付けなかったわたくしにも責任があります。だからこそ、わたくしの手で終わりにしてみせます。

隣にいるお義母様の気配が、重くなりました。怒っておられるのは間違いありません。

本音を言えば、お義母様が怖すぎて、これ以上ここにいたくありません。ですが、自分で決めた事です。あの男に反省して頂く為にも、もう少し頑張りませんと。

「お義母様、もうすぐ第二幕が始まります。劇が終わるまでは声をかけず見守りましょう。わたくし、耐えますから……」

そう言ってハンカチを取り出すと、お義母様が抱きしめて下さいました。涙が出てきて止まりません。お義母様の娘に、なりたかったですわ。

「説明なさい」

劇が終わってベタベタといちゃついていたケネス様とドロシーに、静かにお義母様が声をかけました。また口付けを交わしています。周りが引いている事にすら気が付かないなんて、この二人はどうしてしまわれたのでしょうか。周囲を見渡すと、お友達や知り合いを何人かお見かけしました。気を遣って席を外してくれる方もおられましたが、ジッと観察している方もいます。わたくし自身も今は、一歩引いた位置で三人を見守っています。

お義母様に声をかけられたケネス様は、呆然とした表情で固まっておられます。

ですが、ドロシーはお義母様を知らないからとんでもない事を言い出しました。

「誰よ、このお婆さん。私達は貴族なのよ。気安く声をかけないでよね」

ドロシーの発言で、場が凍りつきました。

確かに今日は、商談の後ですので、一目で貴族と分かるようなドレスは着ていません。しかし、観劇に来るのは生活に余裕のある人だけです。つまり、貴族や大商人がほとんどなのです。劇場で知らない方に声をかけて頂いたら、丁寧に返事をするものなのに……

ケネス様は、真つ青な顔のまま黙りこくっています。お義母様から目をそらそうとした結果、わたくしに気が付いて更に顔を青くしておられますね。

一方、ドロシーは扇子せんすで顔を隠しているだけのわたくしに気が付きません。いつも周りをみるとドロシーに注意していたのですが、やはりわたくしの話は聞いていなかったのですね。

お義母様は、声色をととても優しいものに変えて、ドロシーに話しかけました。

「失礼致しました。とっても情熱的で素敵だったからお声掛け致しましたの。とてもお似合いね。貴方達のご夫婦なの？」

以前教えて下さいました。わたくしは未熟で、まだお義母様のように上手に出来ません。「えっ!? そう見えます!! やっぱりお姉様よりわたくしの方がケネス様に相応しいですよね!」

「ご夫婦が聞いたのだけど……まあいいわ。ねえ、貴方達は愛し合っているのよね?」

「そうです! やだ! このおばさん話が分かるわ! 嬉しい! ケネス様! お似合いですって!」

ドロシー! お願いだからもうやめて下さい!!

お義母様は優雅に笑っていますけど、手に持つ扇子にヒビが入っておられますわ!!

「ケネス様、初めまして。何度も口付けをされているのを拝見しましたわ。わたくし、夫とは死別してしまつたものだから羨ましくて。本当に仲がよろしいのね」

初めましてと聞こえましたが、気のせいではありませんよね。

息子に……初めましてですか。もう、全てお義母様にお任せしましょう。

怖くて口を出せません。

「そうなのね。おばさんは綺麗だから、また良い人が見つかるわよ」

ドロシー! おばさんと呼ぶのは三回目ですよ!!

お願いです! せめて、おばさんと呼ぶのはやめて下さいましっ!!

お義母様は、淡々と返事をしておられますけど……怖すぎます。

「お慰め頂いて嬉しいわ。そんなに熱い口付けを交わす仲だし、ケネス様と……貴女は?」

「ドロシーよ!」

「ケネス様とドロシー様はご結婚なさっているの?」

「色々あって結婚は無理なの。あ、でもね! ケネス様から三年したら一緒になりましょうって言われたのよ! 素敵でしょう? でも、わたくしは三年もお待ち出来ないから、今日は最後の思い出に連れてきて頂いたの」

「あら、どうして三年も待つのか? こんな素敵な彼女を待たせるなんて良くないわ。すぐ結婚なさればよろしいじゃない。身分差でもおありなの?」

カタカタカタカタ。

あ、ケネス様が小刻みに震えるだけのお人形のようになってしまわれました。ドロシーは、ケネス様の異常に気付く様子はなく、嬉しそうにお義母様と話を続けています。さすがお義母様ですね。言い逃れ出来ないように少しずつ情報を集めておられます。わたくしが出来るのは、出来るだけ顔を隠してドロシーにバレないようにする事だけです。ドロシーはわたくしに全く気が付かず、楽しそうに話を続けています。

「身分差は少しあるけど問題ないの。でも無理なのよ」  
 「そうなの？ ドロシー様はまだ若いわよね？ 三年待てば婚姻出来るなら素晴らしい事じゃない。ご両親がお二人の仲をご存知なら、婚約者は連れてこないのではないかしら？ ご両親をご存知ないのなら、お知らせしてはいかが？」

「両親は知っているわ。応援もしてくれる。けど、わたくしがケネス様と一緒にするのは無理だから……」

その時、底冷えする声が響きました。

「姉の、婚約者ですものねえ」

ドロシーの言葉を遮ったお義母様は、にっこり笑って微笑みました。

ケネス様は、真っ青な顔で震えておられます。ようやくドロシーも、ケネス様の異常に気が付きました。

「え……？」

「お初にお目にかかります。リンゼイ子爵家の当主ですわ。そうねえ、分かりやすく言うと、ケネスの母親ですわ。このような場で話しかけられた時は、相手の身分が分からなければ丁寧な対応をする事をお勧めしますよ。エリザベスと違って、恥知らずな娘ね。バルタチャ家の当主もこの事をご存知だったなんて、馬鹿にしているわ。ケネス、ちゃ

んと説明なさい」

無理、無理です！ お義母様！

ケネス様はもうカタカタ動くお人形のようにすわっ！！

「なっ……何よ！！ 騙したの!? あ！ お姉様もいるじゃない!!」

ようやく気が付いたのですね。遅すぎますわ。

「二人揃ってわたくしとエリザベスを騙していたのね。ご両親もご存知だったなんて……リンゼイ子爵家も舐められたものね」

お義母様は、優しい口調で穏やかに話しかけておられます。

この声は、最上級にお怒りになった時のものです。

ですが、この場でそれが分かるのはわたくしとケネス様だけです。ドロシーは、お義母様の優しい声に叱られていないと判断し、調子に乗りペラペラと話し始めました。

「ケネス様はわたくしを愛しているの！ 何度も婚約者を変えるようにお願いして下さったのに、お姉様でないと駄目だと話を聞いて下さらなかったのですわ。お義母様、わたくしの方がケネス様に相応しいですわ！」

「貴女にお義母様と呼ばれる筋合いはないわ。それに、ケネスからそんな話は聞いてない。貴女本当にエリザベスの妹？ 礼儀もなっていないし、エリザベスとは違いすぎ

るわ」

わたくしと比べられて、ドロシーが奇声を上げました。ドロシーは、わたくしと比較されると怒るのです。家庭教師の先生が、たまたま見かけたわたくしを褒めた時、ドロシーは屋敷で暴れて、泣いて、家庭教師の先生に掴みかかりました。それ以来、ドロシーの先生には、わたくしの名前を出さないようにお願いしております。

確かに、比べられるのは嫌ですよね。わたくしも両親からドロシーと比べて可愛げがないといつも言われます。とても嫌ですわ。だから、これに関してだけはドロシーの気持ちも分らないでもないです。それ以外は、全く理解出来ませんが。

心配したケネス様がドロシーに声をかけると彼に抱きついて泣き始めました。今回は嘘泣きではありません。わたくしと比較されるのは、泣くほど嫌なのでしょう。

ケネス様は、わたくしを睨みつけています。完全に嫌われましたわね。  
今はわたくしもケネス様の事が嫌いですからおあいこですわ。

こんなところで騒ぎになりたくありません。お義母様がどう動か判断したら、すぐに逃げましょう。わたくしは、お義母様に習った通り、自分の意思を伝える事にしました。

ここは多くの人の目があります。結婚間近の婚約者の妹と口付けを交わしているので、ケネス様の不貞は明らかです。  
商売は、信用が第一ですから、お義母様は世間体をとでも気になさるお方です。多くの目撃者がいますので、わたくしの意思を無視して結婚式を執行しようとはなさらないでしょう。

「両親も知っていたとは思いませんでしたわ。すぐに話し合いの場を設けましょう。わたくしは、ケネス様と結婚出来ませんわ。契約違反ですもの。お義母様、今までありがとうございました。娘になれず本当に申し訳ございません。ケネス様も、今までありがとうございました。どうぞドロシーとお幸せに。ごめんなさい、続きは明日でよろしいですか？ここにいるのは辛すぎますから、失礼致します」

「うちの馬鹿息子がごめんなさいね。明日、そちらにお伺いするから話をしましょう。本当にごめんなさい」

「うちの両親はともかく、お義母様……いえ、リンゼイ子爵は何も悪くありません」  
「もう母とは呼んでくれないわよね。エリザベス、今までありがとう。契約に則って婚約を解消しましょう。もちろん、賠償もするわ。だけど……」

「分かっておりますわ。不貞の原因はわたくしの妹。我が家も賠償をしないとイケないでしょう。ケネス様とドロシーが婚姻すれば慰謝料は相殺になるでしょうけれど、婚姻

しなければ我が家が慰謝料を払う立場になる可能性が高いでしょうね」  
 姉の婚約者と知っていたのですから、ドロシーの有責は明らかです。

そして、ケネス様の方がドロシーより年上です。次の相手を探すのが大変だという理由で、男女問わず年上が慰謝料を貰える事が多いのです。不公平ですし、問題が多い法律ですから、現在見直しがされております。若い初心な女性を騙す者もいるそうですからね。

しかし、現在の法律では明らかにドロシーが不利です。賠償金を払いたくない両親はドロシーとケネス様の婚約を勧めるでしょう。

「エリザベスの気持ち聞かせて」

お義母様は、わたくしを気遣って下さいます。

なんてありがたいのでしょうか。息子の気持ちを撃ぎ止められなかったと、責められる事も覚悟しておりました。だけど、お義母様はケネス様やドロシーに怒っているだけで、わたくしが悪いとは思っていらっしやいません。

なんでもかんでもわたくしのせいにするうちの両親とは大違いです。お義母様の好意に甘えて自分の希望を言う事にしました。

「ケネス様にも、ドロシーにも二度と会いたくありません。それ以外に望みはありません

んわ。わたくしは家で疎まれておりますから、両親はドロシーの味方をするでしょう。愛し合う者同士結ばればよろしいのでは？ 妹は成人しましたので婚姻可能ですわ」

わたくしの言葉に、ドロシーはパァッと顔を輝かせました。

ドロシー、良かったですね。だけど、ポールはドロシーも両親も許さないとはいえずよ。

ポールとセバスチャンは両親を追い出す計画を立てていますので、近いうちに両親は実権を奪われて別荘にでも軟禁されると思います。わたくしとポールで当主の仕事を代行しておりますので、ポールは今すぐ男爵位を継げる才覚が備わっております。

結婚式も、準備は出来ているし招待客も同じですので、一週間後に花嫁だけ入れ替えてそのまま行われる可能性が高いと思います。あまり恥を広げる訳にいきませんし、両親もお金をケチって延期は嫌だと言うでしょう。

ドロシーが家を出れば、ポールも動きやすくなります。それに、お義母様は希望を聞いたら極力叶えて下さるお人です。こう言っておけば、きつと婚約解消の条件に、二度とわたくしと会わない事に加えて下さる筈です。もし加えられなかったら、条件を加えるよう訴えれば良いですわ。それくらいの権利はありますもの。

「分かったわ。エリザベスがそう言うなら、ケネスとドロシー様が婚姻出来ないか、バ

ルタチャ男爵に聞いてみましょう。明日伺うわ。エリザベス、悪いけど明日まではこの恥知らず達と会って頂ける？」

「ええ、明日で最後ならお会いしますわ」

「残念だわ。エリザベスが家に来るのを楽しみにしていたのに。本当にごめんなさい」

「わたくしも両親よりもお義母様を尊敬しております。今までも、これからも。様々な援助やお気遣い、本当にありがとうございます」

我慢していたのに、また涙が流れてしまいます。泣き崩れる事のないように、ハンカチで涙を拭き真つ直ぐ前を向きます。

「エリザベス……こんなに良い子をどうして……本当にごめんなさい。さ、ケネス。じっくり話を聞かせてちょうだい。帰るわよ」

ケネス様は動かなくなつてしまわれましたが、構わず引き摺られていきました。

「わたくしも帰ります。あまりにもシヨックですもの……」

ドロシーと話す気にはなれない。

帰ると言つて、急いでその場を去りました。

「ちよつと！ 置いていかないでよ！ どうやって帰れば良いの!？」

ドロシーの叫びが聞こえた気がしますが、気のせいという事に致しましょう。

ドロシーは、三時間後に帰ってきて文句を言っていました。本当に、一人じゃ何も出来ないのですね。家の馬車は待機していたのに、馬車乗り場の場所が分からなかったそうです。騒いでいたら、劇場の方が案内して下さったそうです。

わたくしが可愛いからよ！ と大威張りでしたけど、単に迷惑だから声をかけられただけだと思いますよ。しかも、馬車乗り場でうちの使用人の顔が分からなくて劇場の方に搜索させたそうですわ。

迷惑をかけてしまったので、後で劇場にお詫びに伺いましょう。

ドロシーが悪いのに、役に立たない使用人をクビにしてやると両親が叫んでおりましたので、急いで御者を領地に避難させて、セバスチャンに、役に立たない使用人はクビにしたと報告してもらいました。どうせ顔も名前も覚えていないのです。しばらく領地で働いてもらい、ここに帰ってくればまた普通に働けます。両親もドロシーも一度も領地に来た事がありませんから、気付かれる心配はありませんわ。

わたくしとポールは、いつもこうして真面目に働く使用人を守っております。けれど、両親やドロシーは自分におべっかと言う使用人を最頂しますので、王都の屋敷には両親やドロシーの味方をする使用人もおりますわ。現在、屋敷の使用人の半分程度は両親やドロシーに媚を売る者達です。ポールは、そのような使用人は自分が当主になったら解

雇すると申しております。仕事をあまりせず甘い汁を吸いたい使用人ばかりですので、仕方がありません。

そんな人達が多いので、王都の屋敷では気が抜けません。その為、わたくしの部屋には内鍵をつけてあります。外出時に部屋を荒らされるのは仕方がないと諦めているのですが、鍵をかけておかないと部屋でくつろいでいても両親やドロシーが入ってきますし、父や母の指示を受けた使用人が探りを入れようと侵入してくるからです。父や母に見せられない領地の資料は、常に持ち歩くかセバスチャンがリアに預けておりますわ。

わたくしは、シヨックだからと言い訳をして部屋に籠りました。ドアの向こうで両親とドロシーが罵詈雑言を叫んでおりましたけれど、ポールが上手く追い払ってくれました。

その後、ポールに乞われて鍵を開けると、リアとセバスチャンが一緒に入ってきてくれました。リアは、わたくしの好きなお茶とお菓子を持っています。

今となつてはこの三人だけが、わたくしの大事な家族です。

部屋に入ってきたポールは、頬を膨らませて怒っております。

「姉さん、予定通りとはいえ納得出来ないよ。なんであのクズ共の思い通りになつてるの!? あのビッチ、姉さんに魅力がないから自分が選ばれたなんて自慢気に言ってきた

んだよ!?! 姉さんに危害を加えるなつて言われてなければやつてたよ!?!」

「ビッチって何!?!」

「姉さんは知らなくて良いよ!! 本当に、あのクズとビッチが結婚して良いんだね!?!」

「クズはケネス様、ビッチはドロシーの事よね……?」

「そんな丁寧にならなくて良いから!」

そんな事を言われても、俗語や隠語に疎すぎる商売人は支障が出るのですもの。今まではいずれ子爵夫人になる訳ですし、知らない言葉は絶対に使わないから、と、その手の言葉は覚えないうような気を付けてきましたが、貴族でいられないならそういう訳にもいかないでしょう。でも、何度聞いてもポールは言葉の意味を教えてくださいません。

怒っているポールを、セバスチャンが宥めてくれます。

「坊っちゃん、落ち着いて下さい。お言葉が乱れておられます。当事者のエリザベスお嬢様はシヨックだったにもかかわらず、落ち着いていたそうですぞ」

「一人になつて泣いたけどね。外に聞こえるかもしれない声は抑おさえた方が良いわ」

「姉さん……」

「わたくしの為

に怒ってくれてありがとう。ポール、大好きよ」